

—平成16年度発掘調査報告—

# 埋蔵文化財調査報告書

- 南田原条里遺跡
- 宮ノ前遺跡
- 相山古墳

2008年3月  
兵庫県神崎郡  
福崎町教育委員会



－平成16年度発掘調査報告－

# 埋蔵文化財調査報告書

- 南田原条里遺跡
- 宮ノ前遺跡
- 相山古墳

2008年3月  
兵庫県神崎郡  
福崎町教育委員会

## あ い さ つ

圃場整備などの大規模開発が減少してきている近年の福崎町における調査においては、小規模開発等に伴う試掘・確認調査を中心に行われています。このような形で埋蔵文化財調査が進められ、それぞれの成果が得られている中、整理作業も行い、それによって判り得たこともあります。

それらの成果は、地域の歴史理解には欠くことのできないものと考え、さらに、これらの資料が歴史理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においては、関係者各位のご協力を得て行うことができ、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

福崎町教育委員会  
福崎町教育長 岡本 裕

## 例 言

1. 本書は、平成16年度に行った、試掘確認調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、各個人・団体の依頼を受け福崎町教育委員会が主体となり実施した。
3. 経費は国庫補助金を得て実施した。
4. 各年度の調査体制は以下の通りである。

平成16年度		平成19年度
調査事務局		整理事務局
教 育 長	中野 正義	教 育 長 岡本 裕
社会教育課長	山口 省五	社会教育課長 北山 正和
課長補佐	木村 巧	社会教育課副課長 山下 健介
主 査	出田 直	社会教育係長 出田 直

調査担当

調査員 出田 直

整理作業は、出田 直（福崎町教育委員会）が担当し、梶 智美の補助を得た。

5. 挿図中に使用している方位は基本的に磁北を示している。標高はG.P.Sによって設置した杭の値を使用した。
6. 本書の執筆・編集は出田が行った。
7. 遺構の実測、写真は出田が行い、遺物の実測・製図、遺構の製図等は梶の協力を得た。
8. 現地調査作業には下記の方々のご協力を得た。（順不同・敬称略）  
西井正実、城井直孝、西井康雄、山田正英、長谷川義信、村上由希子、吉識雅仁、  
生田建設株式会社、株式会社ワールド、西大貫区
9. 整理作業に関して下記の方々のご協力を得た。（順不同・敬称略）  
吉識雅仁、村上由希子、谷川美喜代、梶 智美、神崎郡歴史民俗資料館、福崎町産業課

## 目 次

あいさつ・例言・・・・・・・・・・	I	2	南田原条里遺跡（第5次）・・・・	6
目次・図版目次・写真目次・・・・	II	3	南田原条里遺跡（第6次）・・・・	8
平成16年度発掘調査について・・・・	1	4	宮ノ前遺跡・・・・・・・・・・	11
1 西治公民館予定地・・・・・・・・	3	5	相山古墳・・・・・・・・・・	13

## 図 版 目 次

図1 福崎町位置図・・・・・・・・	2	図16 主要遺跡位置図・・・・・・・・	13
図2 調査場所位置図・・・・・・・・	2	図17 相山古墳測量図（H11年）・・	14
1 西治公民館予定地		図18 相山古墳測量図（H16年）・・	15
図3 調査場所位置図・・・・・・・・	3	図19 調査区位置図・・・・・・・・	16
図4 調査区配置図・・・・・・・・	3	図20 調査区1・2土層図・・・・・・・・	18
図5 西治地区土層図・・・・・・・・	5	図21 調査区3土層図・調査区4平面図・	
2 南田原条里遺跡（第5次）		土層図・・・・・・・・・・	20
図6 調査場所位置図・・・・・・・・	6	図22 調査区A土層図・・・・・・・・	21
図7 調査区配置図・・・・・・・・	6	図23 調査区A下層平面図・土層図・・	22
図8 確認調査土層図・・・・・・・・	7	図24 調査区A遺物出土状況図・・	23
3 南田原条里遺跡（第6次）		図25 調査区A遺物出土状況図（下面）	
図9 調査場所位置図・・・・・・・・	8	・・・・・・・・・・	23
図10 調査区配置図・・・・・・・・	8	図26 調査区土層図・・・・・・・・	26
図11 確認調査土層図・・・・・・・・	10	出土須恵器観察表・・・・・・・・	27
4 宮ノ前遺跡		図27 出土須恵器・・・・・・・・	28
図12 調査場所位置図・・・・・・・・	11	図28 出土埴輪（円筒埴輪）・・・・	30
図13 調査区配置図・・・・・・・・	11	図29 出土埴輪（円筒埴輪）・・・・	31
図14 確認調査土層図・・・・・・・・	12	図30 出土埴輪（形象埴輪）・・・・	33
5 相山古墳		図31 出土埴輪（形象埴輪）・・・・	34
図15 調査場所位置図・・・・・・・・	13	出土埴輪観察表・・・・・・・・	35

## 写 真 目 次

写真 現在の相山古墳・・・・・・・・	1	図版4 5相山古墳～図版11 各調査区	
図版 相山古墳イメージ図		図版12 相山古墳出土須恵器	
図版1 1 西治公民館予定地		図版13～14 相山古墳出土埴輪（円筒埴輪）	
図版2 2 南田原条里遺跡（第5次）		図版15 相山古墳出土埴輪	
4 宮ノ前遺跡		（円筒埴輪・形象埴輪）	
図版3 3 南田原条里遺跡（第6次）		図版16～17 相山古墳出土埴輪（形象埴輪）	

# 平成16年度 埋蔵文化財調査一覽

## 試掘調査

遺跡名	所在地	原因者	要因	調査期間	取扱	時代	遺構	遺物	調査面積	地図番号
西治公民館 予定地	福岡町西治	西 治 区	公民館 建設	平成16年 5月6日	工事	中世	なし	土師器	5箇所 20㎡	1

## 確認調査

遺跡名	所在地	原因者	要因	調査期間	取扱	時代	遺 構	遺 物	調査面積	地図番号
南田原桑里 遺跡	福岡町南田原	日産不動産 株式会社	店 舗 建 設	平成16年 5月14日	工事	中世	なし	なし	2箇所 10㎡	2
南田原桑里 遺跡	福岡町南田原	シティーハウス 株式会社	分譲住 宅造成	平成16年 9月3日	工事	中世	なし	土師器、 須恵器	5箇所 20㎡	3
宮ノ前遺跡 (福田)	福岡町福田 字中筋	KDDI 株式会社	無線鉄 塔建設	平成16年 9月14日	工事	中世	なし	なし	2箇所 8㎡	4
相山古墳	福岡町大貫 字相山	個 人	その他 の開発	平成16年7月 ～ 平成17年3月	現状 保存	古墳	主体部 (埋葬 施設)	須恵器、 土師器、 埴 輪	100㎡	5

## 現地説明会

遺跡名	開 催 日	参加者
相山古墳	平成16年12月5日	80名

## 平成16年度発掘調査について

平成16年度の発掘調査は、試掘調査1件と確認調査4件があり、確認調査の内、相山古墳に関しては、現地説明会を開催した。

これらの調査は、基本的に重機を用い、耕作土及び盛土の掘削を行い、壁面精査等は人力により行った。また、危険と考えられる場所に関しては、人力精査等は行わず、写真などで記録が残せる方法をとった。また、調査終了後、安全を確保する意味でも調査区の埋め戻しを行った。

試掘・確認調査の結果、遺構遺物が顕著に確認できる場所は、相山古墳以外になく、相山古墳以外のものは、工事着工となり、相山古墳も部分的に調査を行うに留め、埋め戻しを行い現状保存を行った。この後、土の流れを防ぐための芝生養生や史跡の活用という点から、手づくり埴輪の設置を地元西大貫区が行い、古墳公園として利用できるようにしている。



写真 現在の相山古墳

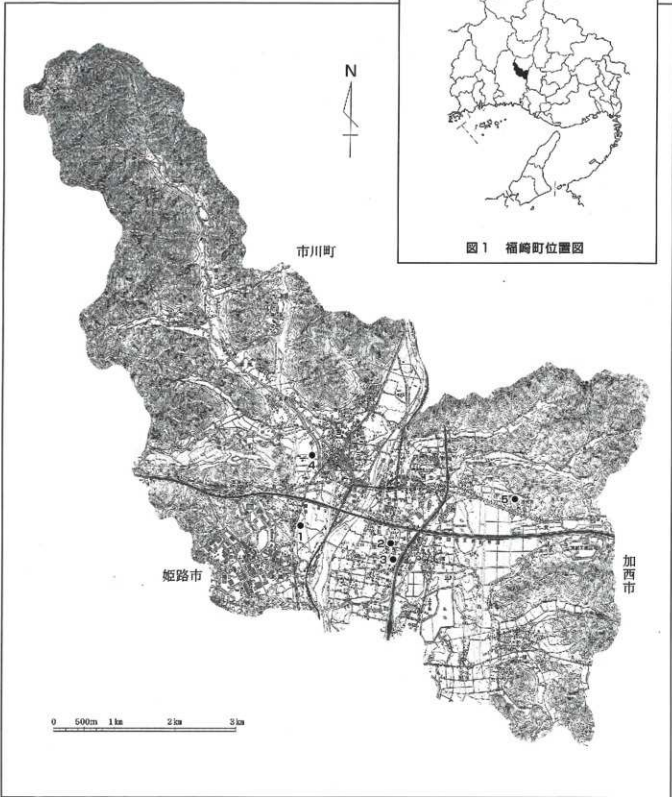
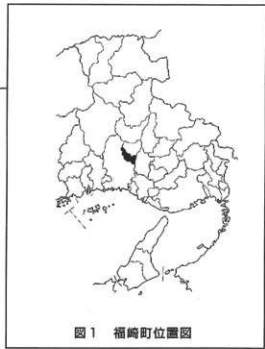


図2 調査場所位置図

## 1 西治公民館予定地

調査地区 神崎郡福崎町西治  
調査主体 福崎町教育委員会  
調査担当 出田 直 (福崎町教育委員会)  
調査期間 平成16年5月6日 (水)



図3 調査場所位置図

### ○調査に至る経過

西治地区の公民館建設計画が策定され、事前調整の中で調査の協力を要請し、作業を行った。

### ○調査方法

造成予定地内の田に2m四方の調査区を5箇所設け、調査を行った。掘削には重機を用い、精査等は人力により行った。記録は、写真及び図面を作成した。

### ○調査概要

#### 周辺の地理的歴史的環境

地形区分上は、低位の氾濫原として位置付けられる場所であり、現況は水田として利用されている場所である。調査地のすぐ西には西谷川が南流している。低位の氾濫原はこの西谷川との関連が強いといえる。

この北方に西治二反田遺跡が確認され、水田として利用されている場所にも微高地が存在し、そこに遺跡が広がることがわかった。西治二反田遺跡は古墳時代から中世にかけての遺跡と考えられ、周辺の古墳時代のものとしては円光寺山古墳や円光寺山西古墳、三昧谷古墳などが知られている。集落遺跡などは他には知られていない。中近世の遺跡としては知られていないが、現在の西治地区の集落を中心として遺跡が存在する可能性が高い。

### ○土層状況

基本的な土層堆積の状況は、耕作土と床土を有し、その下層には、砂質土で有るが旧耕作土や旧床土と考えられる堆積が見られた。造成予定地の東側は茶褐色砂層が堆積している。西側に関しては、砂層及び砂礫層の氾濫原と考えられる堆積が見られた。

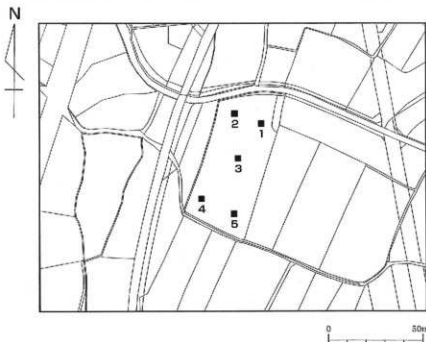


図4 調査区配置図



## 調査区の概要

調査区を5箇所設定した。

### 調査区1

建設予定地北側の東に設定した調査区である。

土層は基本層序と同じであるが、最下層の褐色砂層は、氾濫原でもやや高い範囲に入るものといえる。

### 調査区2

北側の西に設定した調査区である。

西谷川に近いことにより耕作土から約30cm下に小石混じりの砂層が見られる。

### 調査区3

中央部分に設置した調査区である。

耕作土から約40cm下層に西谷川の氾濫と関連のある堆積が見られた。

### 調査区4

南側の西に設定した調査区である。

耕作土から約20cm下層で西谷川の氾濫に伴う堆積が見られた。最下層では、直径10～20cmの川原石が多量に見られた。

### 調査区5

南側の東に設定した調査区である。

耕作土から約40cm下層で褐色系の堆積が見られ、調査区1と同様の堆積状況である。この褐色系砂層から1点土師器の出土が見られたが、氾濫原に伴う遺物と考えられ遺跡として扱えないと考えられる。可能性としては、北方約300mにある西治二反田遺跡との関係が想定できる。

## 遺構

何も確認できなかった。

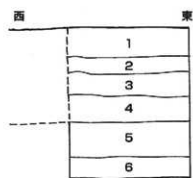
## 遺物

調査区5から土師器が1点出土した。

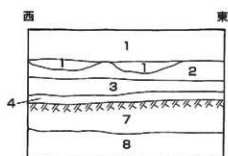
## ○まとめ

試掘調査の結果、遺跡とは認められなかった。調査区5から出土した遺物は遺跡内遺物というよりも、北方に所在する西治二反田遺跡との関連する遺物と考えることも可能ではないか。これにより2次的な移動を伴うものであり、遺物量からしても当地区を遺跡として位置付けることはできないといえる。

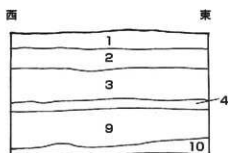
この結果を受けて、今後当地を工事するにあたっては問題がないものとした。



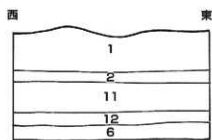
調査区1



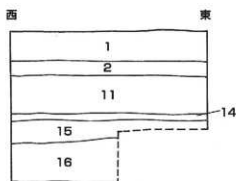
調査区2



調査区3



調査区4



調査区5

- 1 耕作土
- 2 黄茶色土 (床土)
- 3 灰茶色砂質土
- 4 茶灰色砂質土
- 5 灰褐色粗砂層
- 6 灰褐色砂層
- 7 灰色小石混じり粗砂層
- 8 灰茶色粗砂層
- 9 灰色粗砂層
- 10 灰茶褐色粘質土
- 11 灰茶色砂層
- 12 灰色砂層
- 13 灰色砂礫層
- 14 茶褐色土
- 15 茶褐色砂層



図5 西治地区土層図

## 2 南田原条里遺跡（第5次）

調査地区 神崎郡福崎町南田原

調査主体 福崎町教育委員会

調査担当 出田 直（福崎町教育委員会）

調査期間 平成16年5月14日（金）



図6 調査場所位置図

### ○調査に至る経過

平成16年5月17日から工事に入る予定の店舗建設工事計画があり、当該地は既存建物が存在し、既存建物の上部構造物と基礎の撤去を行い、次の店舗工事に移る工程が予定されていた。既存構造物の撤去と同時に基礎の撤去を行う際に、遺構の状況等を確認するために調査を実施する必要性があり、5月14日に実施した。

### ○調査方法

造成予定地内の基礎部分付近の2箇所に調査区を設け、調査を行った。掘削には重機を用いた。埋土の状況により中に入っている作業は危険と判断したために精査等は特に行わず目視による確認を行った。記録は、写真及び図面を作成した。

### ○調査概要

周辺の地理的歴史的環境

地形区分上は、低位の氾濫原として位置付けられる場所であり、現況は既存建物が存在する場所である。当該地は元は水田として利用されており、確認調査の際も旧耕作土が確認された。

南田原条里の中に位置し、南田原条里遺跡として周辺の調査も過去実施してきた。その結果、一部においては微高地が確認され、遺物が顕著に見られた場所もあったが、当該地周辺では顕著な遺構及び遺物の出土は見られなかった。遺物においては、奈良時代から中世にかけてのものがみられ周辺にその時代の遺跡の存在を示すものと考えられる。

ただ、現在のところ条里内に集落遺跡等認識されている場所は見られない。

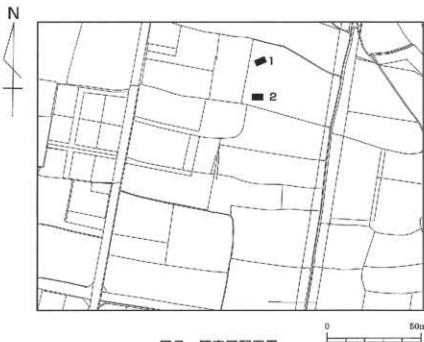


図7 調査区配置図

### 土層状況

基本的な土層堆積の状況は、既存構造物建設の際の盛土とその下層に耕作土と床土を有し、その下層には、褐色土系の堆積が見られた。

### 調査区の概要

調査区を2箇所設定した。

調査区は、撤去工事や基礎工事等に影響の無い範囲でしかも、確認調査を行い判断できる場所に設けた。

### 調査区1

建設予定地西側の北に設定した調査区である。

土層は基本層序と同じである。

### 調査区2

西側の南に設定した調査区である。

調査区1と同様の層序であり西から東に地形が高くなる状況が見られた。

### 遺構

何も確認できなかった。

### 遺物

何も出土しなかった。

### ○まとめ

確認調査の結果、遺構及び遺物の出土は見られなかった。土層状況においても、南に300m程度の場所でも確認調査を行った際の状況とほぼ同様であり、遺構は確認できていない。制約がある中で2箇所の調査区とはいえ、周辺の状況と照らし合わせると、工事には支障のない結果が得られたといえる。

また、仮に遺構が確認されたとしても、現地表面から約140cmのところ基礎の下端がくる計画になるので、旧耕作土の最下面が掘削面の最深部となることから判断しても、工事には支障のない状況であるとした。

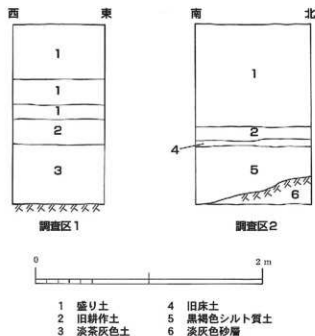


図8 確認調査土層図

### 3 南田原条里遺跡（第6次）

調査地区 神崎郡福崎町南田原  
調査主体 福崎町教育委員会  
調査担当 出田 直（福崎町教育委員会）  
調査期間 平成16年9月3日（金）



図9 調査場所位置図

#### ○調査に至る経過

平成16年度に住宅造成工事の計画があり、南田原条里遺跡に隣接するために協力を得て確認調査を実施した。

#### ○調査方法

造成予定地内に5箇所の調査区を設け調査を行った。掘削には重機を用いた。壁面精査及び記録写真図面作成は適宜行った。

#### ○調査概要

周辺の地理的歴史的環境

地形区分上は、低位の氾濫原として位置付けられる場所であり、現況は水田である。

南田原条里に隣接する形で周辺からは若干の遺物は確認された場所があるが、顕著な遺構は確認されていない。遺物も2次的な移動が考えられ、時代も古墳時代から中世と幅広く見られるものの遺物量も少ない状況である。

調査場所の東には、西光寺遺跡があり、有舌尖頭器の出土した場所や、弥生時代の遺物が出土した南田原中野田遺跡が存在する。古墳時代から中世にかけての遺物は少量ではあるが見られるものの顕著な遺構を伴う場所は知られていない。

#### 土層状況

基本的な土層堆積の状況は、耕作土の下に灰色粘質土系の土層があり、床土的なものと考えられる。その下層には、礫混じり土の堆積及びクロボク層の堆積が見られる。

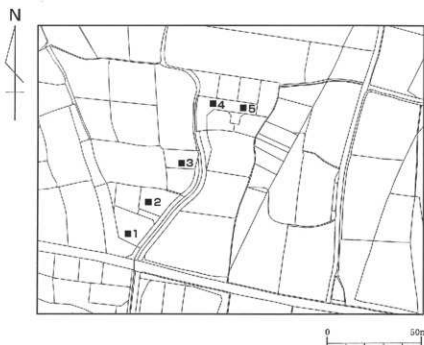


図10 調査区配置図

## 調査区の概要

調査区を5箇所設定し、調査区は、南から1～5とした。

### 調査区1

造成予定地最南端に設定した調査区である。

土層は基本層と同じであり、灰色粘質土中から1点須恵質土器の出土が見られた。その下層はクロボク層を基本とする堆積が見られた。

### 調査区2

調査区1の北に設定した調査区である。調査区1と同様の層序が確認された。

### 調査区3

耕作土下層に茶灰色粘土層が見られ、床土と考えられる。その下層には、暗灰色粘土層や茶灰色礫層が確認されたが、遺構遺物とも見られなかった。

### 調査区4

1、2、3とは少し離れた北側に位置する調査区になる。

耕作土下層では、暗茶灰色土がありその下層にはシルト質の黒褐色土層が堆積する。この土層の上部からは遺物の出土も見られたが顕著な状況ではない。また、この土層の状況は、西方で確認調査をした際にも見られた。

### 調査区5

調査区4の東側に設定した。基本的に調査区4と同様である。

## 遺 構

何も確認できなかった。

## 遺 物

調査区1、調査区3、調査区5から遺物の出土が見られた。

調査区1 須恵質土器（1点）

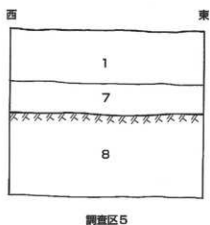
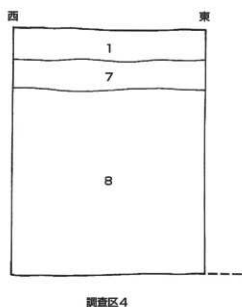
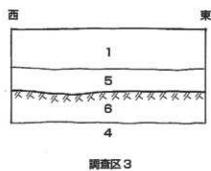
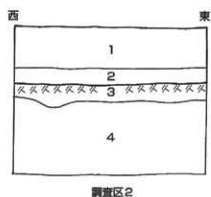
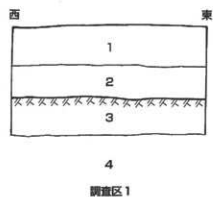
調査区3 土師器（1点）

調査区5 須恵質土器、土師器（各1点）

## ○まとめ

確認調査の結果、遺物の出土は3箇所で見られたが、2次的な移動が考えられた。土層状況からも、遺構面は確認できなかった。

遺物は、中世の須恵質土器と土師器と考えられ、周辺の状況と同じような結果となっている。遺構が無いことや遺物の状況からしても、工事には支障のない状況であるとした。



- 1 耕作土
- 2 灰色粘質土
- 3 黒褐色礫混じり層
- 4 茶灰色礫層
- 5 茶灰色粘土層 (床土?)
- 6 暗灰色粘土層
- 7 暗茶灰色土
- 8 黒褐色シルト

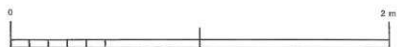


図11 確認調査土層図

#### 4 宮ノ前遺跡

調査地区 神崎郡福崎町福田字中筋  
調査主体 福崎町教育委員会  
調査担当 出田 直（福崎町教育委員会）  
調査期間 平成16年9月14日（火）

##### ○調査に至る経過

平成16年度において当該予定地で無線鉄塔及びキュービクルを建設する予定があり、遺跡確認の依頼があった。そこで、周知の遺跡かどうかの確認を地図上で行ったところ、宮ノ前遺跡に該当する場所であり、発掘承諾書の提出を持って確認調査を行う準備をすすめ、9月14日に確認調査を実施する運びとなった。



図12 調査場所位置図

##### ○調査方法

無線鉄塔建設予定地内に2箇所の調査区を設けた。掘削には重機を用いた。適宜精査を行い、写真と図面を作成した。最終的には埋め戻しを行い完了した。

##### ○調査概要

周辺の地理的歴史的環境

地形区分上は、氾濫原として位置付けられる場所であり、現況は水田として利用されている。このすぐ東には、二級河川の七種川が流れ、その氾濫原といえる。西には一段高い場所があり段丘地形に位置付けられる場所がある。

周辺は、遺物散布地の宮ノ前遺跡として周知されている場所であり、隣接地を含めて遺構の広がり確認されたことは調査の機会がなく知りえない。過去の分布調査の際には、弥生土器や中世の土器が散布していたようである。

調査場所から南西の山上には、五郎ヶ谷古墳の存在が知られているが、詳細は定かでない。

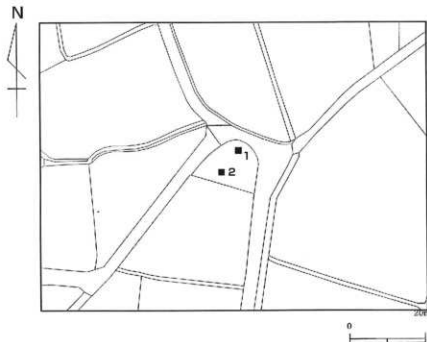


図13 調査区配置図



西に広がる長野、神谷（こだに）地区には、方墳の可能性のある、神谷（こだに）古墳が知られ、隣接地には石棺材も確認されている。

いずれも詳細は定かでないが、遺跡の存在が知られている。

#### 土層状況

耕作土の下には、床土と考えられる暗黄茶色土が10cm程度見られ、その下層には暗灰褐色砂質土の堆積、最下層には暗褐灰色砂礫層の堆積が見られる。

#### 調査区の概要

調査区を2箇所設定した。

#### 調査区1

建設予定地北側に設定した調査区である。

土層は上記と同じである。遺構及び遺物は見られなかった。

#### 調査区2

建設予定地南に設定した調査区である。

調査区1と同様の層序であり、遺構及び遺物は見られなかった。

#### 遺構

何も確認できなかった。

#### 遺物

何も出土しなかった。

#### ○まとめ

確認調査の結果、遺構及び遺物の出土は見られなかった。土層状況においても、氾濫原の状況を示し、地形的にも一段低い場所には遺跡の広がる可能性が少ないことを示している。狭い範囲といえども遺物の出土が皆無ということや土層状況から周辺の遺跡の広がりや密度的にも一つのあり方を示すものではないだろうか。

このことから判断しても、工事には支障のない状況であるとした。

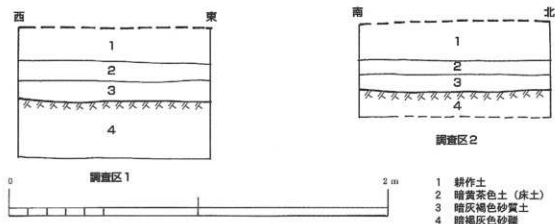


図14 確認調査土層図

## 5 相山古墳

調査地区 神崎郡福崎町大貫字相山  
調査主体 福崎町教育委員会  
調査担当 出田 直 (福崎町教育委員会)  
調査期間 平成16年7月～平成17年3月

### ○調査に至る経過

平成16年度において古墳周辺の公園整備が地元有志の手で行われていた。そこには、相山古墳が存在し、公園整備において古墳に影響を及ぼさない範囲を明確にするともに古墳の性格を把握する必要が生じた。そのために、7月からの準備と確認調査を実施するに至った。

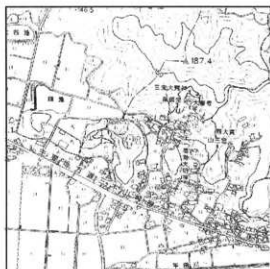


図15 調査場所位置図

### ○調査方法

古墳の墳形と規模を確認するための調査区を設定し、人力による掘削を行った。過去の調査区の再確認と墳丘裾の確認、埴輪の確認を行った。適宜精査を行い、写真と図面を作成した。最終的には埋め戻しを行い完了した。

### ○調査概要

周辺の地理的歴史的環境

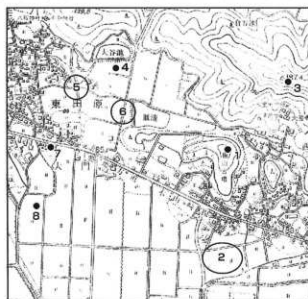
相山古墳は字相山にあり、山上に古墳が築造されている。この山上からは、福崎の平野部が一望できる立地条件のいい場所に位置する。すぐ北には西の妙徳山から東の日光寺山にかけて伸びる山塊があり、それとは別の独立した形で南に相山は存在する。

相山の南は、平野部が広がり東に行けば加西市につながる谷部へとつながる。

平成3年から圃場整備が行われ、その際に確認された西大貫遺跡は、縄文時代から中世にかけての集落遺跡として知られている。(1)

また、西大貫遺跡の西方には旧石器が採集された大門遺跡なども存在し、古くからの人の足跡が看取できる。古墳から北東の山腹には、大善寺裏山石棺で知られる箱式石棺がある。さらに、相山古墳の西には近世の墓地と考えられる相山遺跡が隣接していたが、溜池の土取りにより消滅した。

(1) 出田 直『福崎町の埋もれた歴史Ⅰ 田原地区』神崎郡歴史民俗資料館 平成10年(1998)



- |           |              |
|-----------|--------------|
| 1 相山古墳    | 5 大門遺跡池田地区   |
| 2 西大貫遺跡   | 6 大門遺跡皿池/下地区 |
| 3 大善寺裏山石棺 | 7 池ノ下古墳      |
| 4 大谷前古墳   | 8 旧石器採集地点    |

図16 主要遺跡位置図

### ○相山古墳の調査歴

福崎町史にも引用されているように、古墳の存在は、古くから知られていたことがわかる。山全体が古墳として考えられた時期も有り、当初は前方後円墳ではないかと言われた。また、ここからは表採品である埴輪が採集されており福崎町内唯一の埴輪を持つ古墳であることも知られていた。(2)

過去、この古墳の墳丘上部が調査されていたことは伝聞によって知られているが、出土遺物等の記録について詳細はわかっていない。

調査の痕跡と考えられるのは、墳頂部北西寄りの土の盛り上がりと西に向かって伸びる溝状のくぼみからも推測できた。この過去の調査状況については後述する。

その後、古墳周辺環境整備等が地元有志の手によって行われ、周辺の樹木が伐採された状況で測量調査を行った。前方後円墳の可能性は既に弱く、円墳の可能性も指摘されていた。そのために、墳丘測量を行い墳形の可能性を求めた。(3)

その結果、北側に墳丘と山を区画するかのように平坦面をもつ部分が認められ、南側においても墳丘との変化点が明確に認められる部分があった。その結果、相山古墳は円墳の可能性が強まった。

(2) 松本正信「西大貫相山古墳」【福崎町史】第三巻 福崎町 平成2年(1990)

(3) 平成11年度に、航空写真測量を行い図化を行った。

### ○調査区の設定

調査区は、過去の調査状況を把握するためと、古墳の墳形とその規模を確認するために設定した。過去の調査の際に設けられたと考えられるくぼみ状のところを利用して、東西方向と南北方向に十文字になる溝状の調査区を設け、東西方向を調査区1、南北方向を調査区2とした。また、墳頂部に過去の調査痕跡が確認でき、その場所を面的に広げた。面的に広げた際の調査区を調査区3、調査区4、調査区5とした。さらに、墳丘の裾を確認するために設けた調査区を調査区A、調査区B、調査区C、調査区D、調査区E、調査区F、調査区Gとし、墳頂部の確認のために設けた調査区を調査区Hとした。



図17 相山古墳測量図 (H11年)

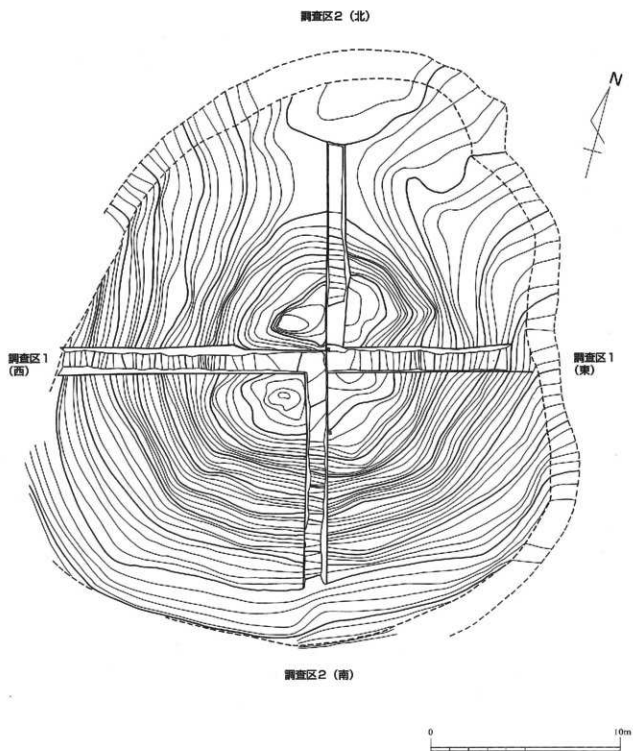


图18 相山古墳測量図 (H16年)

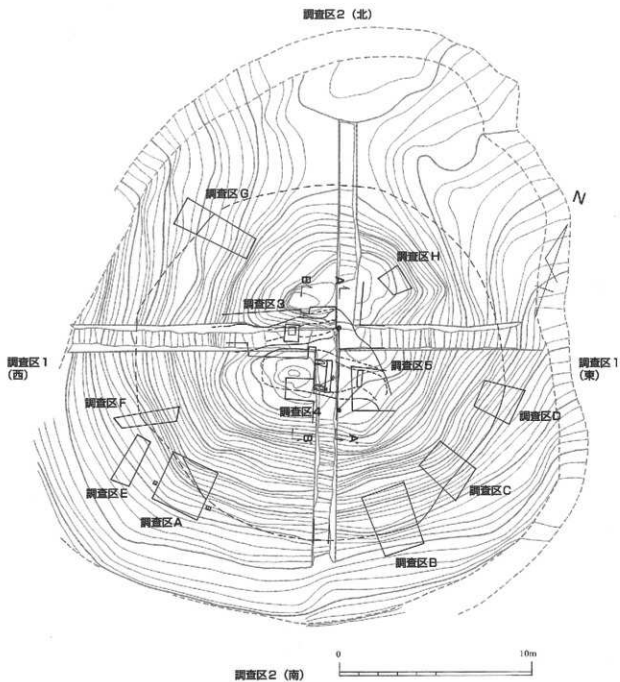


図19 調査区位置図

## ○調査区の状況

### 調査区1

調査区1は、中央をはさみ調査区1（西）調査区1（東）に分ける。

### 調査区1（西）

墳頂部は過去の調査の際に、掘り上げたと考えられる土が見られた。溝状になっていた部分を調査区とし、過去の調査場所を再調査するように設定した場所でもある。墳頂部の土と同様に、古墳とは直接関係のない流れ込んだ土の堆積が裾部でも確認できた。土層3, 4, 5は流れ込みの土と考えられ、盛土と考えられる堆積は水平堆積が見られる部分とすることが出来る。ここでは、土層6のところでは地山面との変化点が見られ墳丘裾とすることが出来る。後述する各調査区の墳丘裾と考えられる部分を元に復元する古墳形状と一致する場所にあたる。

### 調査区1（東）

後述する、調査区B, C, Dからも看取されるように、過去の調査の際の土の流れ込み等による堆積が確認でき、土層16～22の黄色系の土層堆積は流れ込みと考えられる。それより下層に位置する堆積は調査区1（西）でも見られたような水平堆積が見られる。同様に墳丘裾と考えられるところは、土層32, 33は流入土であり、その変化点を持つてとらえることが出来る。土層33には埴輪片の出土が見られた。

この時点での埴輪の基部や設置痕は確認できなかった。

### 調査区2

調査区2も調査区1同様に中央を境に調査区2（北）、調査区2（南）に分ける。

#### 調査区2（北）

相山の自然地形でも一番高い部分に当たる場所につながり測量調査でも平坦面及び溝状の区画が考えられる状況が確認されていた。北側にも土の流れ込みが確認され、腐食土下層の、土層35は明らかに流入土とすることが出来る。土層16は調査区1（東）の土層16と対応し、調査区1（東）の状況から墳丘盛土とすることはできない。また、後述する調査区2（南）や墳頂部の調査区4の状況からも盛土とするのではなく、過去の調査時の堆積とするものである。

調査区2（北）は他の裾部と違い北側の自然地形と古墳を明確に区画する意識がある溝状の掘り込みが確認できた。幅約120センチ深さ約20センチを測るもので、北側の自然地形は味噌岩と言われる岩盤面を掘削していることから明瞭な状況であり、埋土の堆積が確認できた。調査区2（北）の墳丘盛土とする部分は、他の部分のような水平堆積ではないものの、地形的に裾部と墳頂部の差が余りなくそのまま盛り土を行い成形している状況がみられ、後述の調査区Gでも一部同様に考えることが出来る堆積が見られた。

#### 調査区2（南）

自然地形との関係から最も落差をもつ部分に設定しており、調査地区においては、過去の調査時の流入土が少ない部分でもあった。しかし、墳頂部に関しては、調査区4で後述するように、過去調査時の埋土と墳丘盛土と考えられる堆積の差が明瞭に確認できた。基本的に、水平堆積を持つものをもって古墳盛土と考えることが出来、墳丘裾と考えられる場所は、変化点かつ地山面を削り込むような場所があった。この部分をもって復元することは墳形と規模的に矛盾を持つものでない。

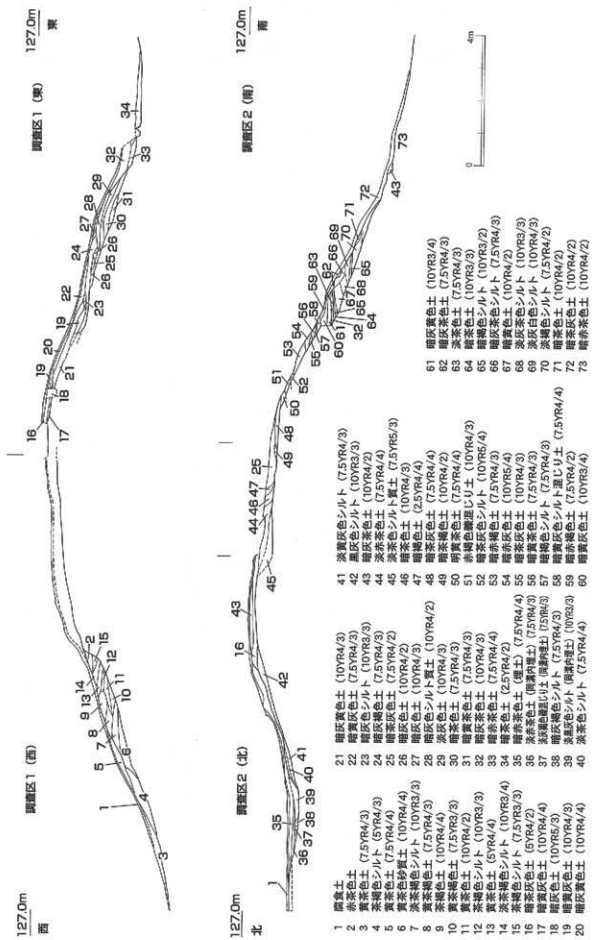


図20 調査区1・2土層図

- |                      |                       |                       |                      |
|----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|
| 1 暗黄土                | 21 暗灰黄色土 (10YR4/3)    | 41 淡黄灰色シルト (7.5YR4/3) | 61 暗灰赤色土 (10YR3/4)   |
| 2 赤茶色土 (7.5YR4/3)    | 22 暗灰赤色土 (7.5YR4/3)   | 42 暗灰赤色シルト (10YR3/3)  | 62 暗灰赤色土 (7.5YR4/3)  |
| 3 黄茶色土 (5YR4/3)      | 23 暗灰赤色シルト (10YR3/3)  | 43 暗灰赤色土 (10YR4/2)    | 63 赤茶色土 (7.5YR4/3)   |
| 4 茶褐色土 (7.5YR4/4)    | 24 暗灰褐色土 (7.5YR4/3)   | 44 淡赤茶色土 (7.5YR4/2)   | 64 暗赤茶色土 (10YR3/3)   |
| 5 黄茶色土 (7.5YR4/4)    | 25 暗灰赤色土 (7.5YR4/2)   | 45 淡赤茶色土 (7.5YR5/3)   | 65 暗褐色シルト (10YR3/2)  |
| 6 黄茶色砂質土 (10YR4/4)   | 26 暗灰赤色土 (10YR4/3)    | 46 暗褐色土 (10YR4/3)     | 66 暗褐色シルト (7.5YR4/3) |
| 7 淡茶褐色シルト (10YR3/3)  | 27 暗灰赤色土 (10YR4/3)    | 47 暗褐色土 (2.5YR4/4)    | 67 暗黄赤色土 (10YR4/2)   |
| 8 黄茶褐色土 (7.5YR4/3)   | 28 暗灰赤色シルト (10YR4/2)  | 48 暗赤褐色土 (7.5YR4/4)   | 68 淡灰赤色シルト (10YR3/3) |
| 9 黄茶褐色土 (7.5YR3/3)   | 29 淡灰赤色土 (10YR4/3)    | 49 暗赤褐色土 (7.5YR4/2)   | 69 淡灰白色シルト (10YR4/3) |
| 10 暗赤褐色土 (10YR4/2)   | 30 暗赤褐色土 (7.5YR4/3)   | 50 暗赤褐色土 (7.5YR4/2)   | 70 赤褐色土 (10YR4/2)    |
| 11 暗赤褐色土 (10YR3/3)   | 31 暗赤褐色土 (7.5YR4/3)   | 51 赤褐色土 (7.5YR4/3)    | 71 暗赤褐色土 (10YR4/2)   |
| 12 赤褐色シルト (10YR3/3)  | 32 暗赤褐色土 (7.5YR4/3)   | 52 赤褐色土 (7.5YR4/2)    | 72 暗赤褐色土 (10YR4/2)   |
| 13 赤褐色土 (5YR4/4)     | 33 暗赤褐色土 (7.5YR4/3)   | 53 赤褐色土 (7.5YR4/3)    | 73 暗赤褐色土 (10YR4/2)   |
| 14 赤褐色シルト (10YR3/3)  | 34 暗赤褐色土 (7.5YR4/4)   | 54 赤褐色土 (7.5YR4/4)    |                      |
| 15 赤褐色シルト (7.5YR3/3) | 35 暗赤褐色土 (2.5YR4/2)   | 55 暗赤褐色土 (7.5YR4/3)   |                      |
| 16 暗赤褐色土 (10YR4/4)   | 36 暗赤褐色土 (暗赤褐色土)      | 56 暗赤褐色土 (10YR4/3)    |                      |
| 17 暗赤褐色土 (10YR4/3)   | 37 暗赤褐色土 (暗赤褐色土)      | 57 暗赤褐色土 (7.5YR4/3)   |                      |
| 18 暗赤褐色土 (10YR5/3)   | 38 暗赤褐色シルト (7.5YR4/3) | 58 暗赤褐色シルト (7.5YR4/3) |                      |
| 19 暗赤褐色土 (10YR4/3)   | 39 淡灰赤色シルト (暗赤褐色土)    | 59 暗赤褐色土 (7.5YR4/2)   |                      |
| 20 暗灰黄色土 (10YR4/4)   | 40 淡赤色シルト (7.5YR4/4)  | 60 暗灰黄色土 (10YR3/4)    |                      |

## ○墳頂調査区

墳頂の調査区は調査区1、2の状況により面的に広げた部分であり、調査区3は、調査区1（西）に重なる部分であり、調査区4は調査区2（南）を広げた部分とし、その東側を調査区5とする。

### 調査区3

面的には、図21にある土層3の淡茶灰色土が見られ、その堆積は調査区1（西）に見られる過去の調査時掘削土と対応する。これを面的に確認すると、測量時に見られたくほみ部分と符合し、くほみは過去の調査時に設けられた調査区であったことがわかった。

土層17に関しては、下層に上層と違う堆積が認められたので、補足的に調査区を設けた。その結果、墳丘盛土と考えられる部分を掘削していることとなり、この時点で掘削をとめた。

これによって、過去の調査時に既に墳丘盛土まで掘削が行われ、ここに何かがあったのかどうかはわからない状況になっていたことがわかった。

### 調査区4

調査区2（南）の拡張部分にあたり、土層は、調査区2（南）の下層部分に該当する。土層3は、調査区3の過去の調査時の堆積に該当し、土層10、12は墳丘盛土と考えられるものであり、それ以外は、過去の調査時に埋め戻された堆積とすることが出来る。これによって、過去の調査は、墳頂の南部分を調査した後に北部分を調査していることがわかる。

南部分は、図21にある平面図にあるような主体部の一部と考えられる部分が確認された。両サイドの落ち込みは過去の調査時の掘り込みに該当する部分であるが、これが、主体部の掘り込みに該当するかは明瞭でない。しかし、主体部に関する溝状のくほみなどを考えるると掘り方の可能性も考えられるものである。

面的には調査区4南側に東西方向に伸びる溝状のものが南北2本見られ、東側に小さなくほみが見られる。また、南にある溝の東端に石が据え付けられていた。

墳頂部にあることから主体部と考えることの出来るものであり、石は棺おけを固定するために設けられた石の可能性が高い。

調査区4の埋め戻された土の中から、小片であるが須恵器が出土し副葬品が存在していたことが考えられた。さらに、長辺約3～5cmを測る小石（川原石）が多く見られた。再掘削した土をふるいにかけて採集したものであり、過去の調査時に掘り上げられたものが埋め戻しの土の中に含まれていたものと考えられる。これらは、明らかに山にある石ではなく他の調査区からは出土しないことから、墳丘盛土中に含まれるものでもなく、墳頂部の過去の調査埋め戻し土中にあることから考えても、主体部と考えられる部分から出土した可能性が高い。これによって、主体部は礎床を持っていたことが考えられる。

調査区の制約もあり西側の端部を明確には確認していないが、面的な広がりには図19にもあるような広がりを見せる。



## 調査区5

調査区5は、調査区4の東側に広げた部分であり調査区4で確認できた過去の調査区の延長がわかった。掘削が著しく掘り出した土も東斜面に意図的に落としている状況が見られ、測量調査時の古墳の形状は東側に急傾斜が見られる部分を作り出す要因にもなっていた。そのために、調査区4で確認された主体部の東端の状況は不明瞭であった。しかし、この部分でも川原石の出土が見られた。

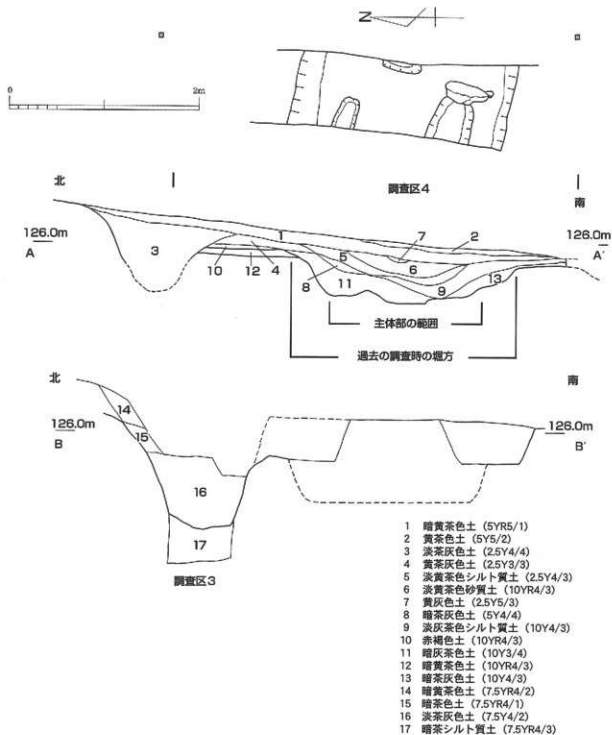


図21 調査区3土層図・調査区4平面図、土層図

### ○墳丘裾部調査区

墳丘の裾部を確認するために設けた調査区で設置順に記号を付し、調査区A～Gの7箇所とした。

#### 調査区A

墳丘の南西部に設けた調査区である。

まず土層状況であるが、北面と東面の状況を確認したが、この部分に関してはいずれも墳丘盛土ではなく上部からの流入土とすることが出来る。特に平面の北東部に段状の部分が見られ、落ち込み部分の土層堆積と上面の堆積から判断できる。この段状部分を古墳の裾と考えることが出来、復元にも矛盾を生じない。

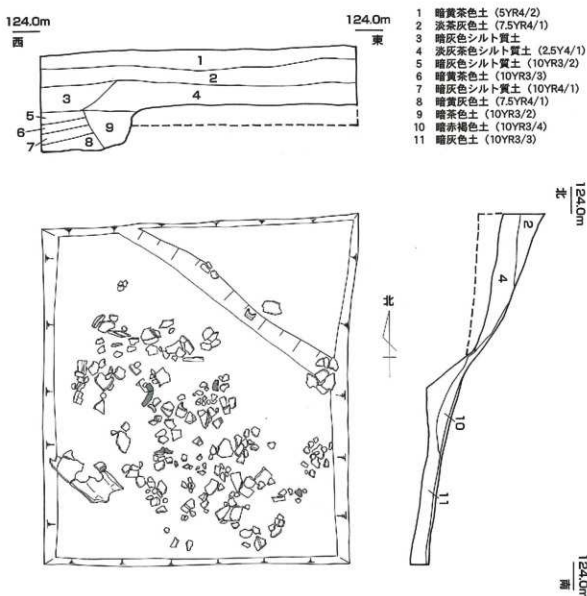


図22 調査区A土層図

この調査区からは、まとまった形で埴輪の出土が見られた。埴輪の出土状況から上方からの転落の可能性があり、後述するように埴輪の下部が欠損しているものが多い。また、墳丘裾に配置した埴輪列の基部も確認できなかった。他の調査区の状況と調査区Aとでは埴輪の出土密度が著しく違い、埴輪の設置状況を考えるうえでも重要な要素になりうると考えられる。

#### 調査区A遺物出土状況

この調査区にある、北東部の平坦面上にも少量ではあるが埴輪片が見られ、そこから落ち込む部分と下段部分に関しては多くの埴輪片が見られる。埴輪片には、円筒埴輪の底部から口縁部がわかるものの縦に半分欠損しているもの（図28-6）や形象埴輪も含まれている。形象埴輪には、人物埴輪（図30-1）や不明ながらも形象埴輪と考えられるもの（図30、31）が混在して出土した。さらに、この中に須恵器も混じって出土している。（図27）

下面には復元可能な埴輪片も見られるが、底部が欠損しているものが多く見られた。下面からは須恵器は見られなかった。

#### 調査区A下層

埴輪を取り上げたあとの状況を確認し、平坦面を確認した。土層図で見られる落ち込みを墳丘裾としたときには、一部いびつなところもあり、平坦面の端部を墳丘裾と考えると形状は安定する。この部分が面的になり埴輪の出土状況と関係があるのかは判然としないが、隣接する調査区Eの一部には、調査区Aからの平坦面の続きがみられるが、調査区Fからは面的な広がり確認できず、平坦面は部分的なものと考えることが出来る。

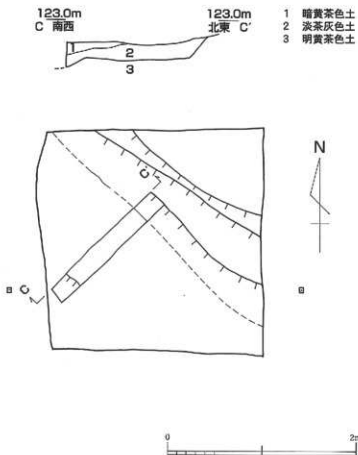


図23 調査区A下層平面図、土層図

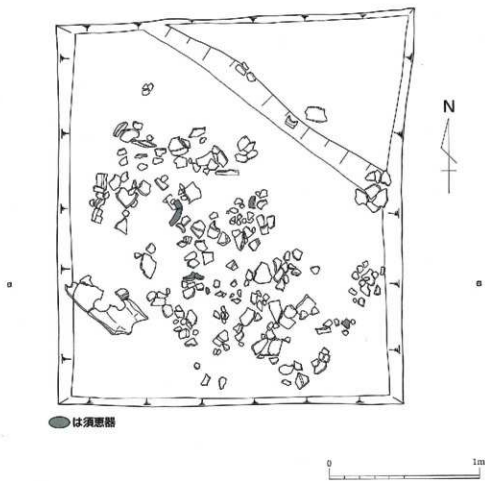


图24 調査区A遺物出土状況図

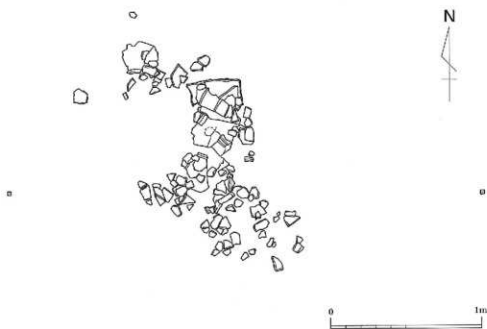


图25 調査区A遺物出土状況図（下面）

#### 調査区B

この調査区は南東部分の裾を確認するために設けたもので、埴輪の状況も合わせて確認するものであった。約20cm程度で地山面が確認でき、調査区2等で確認された盛土堆積のような土層は見られなかった。裾部ということもあり、地山面を削り出しており、墳丘裾部で変化点が見られる。ここの堆積は、上部の過去の調査時の土の流入と考えられる。ここからは、遺物の出土もなく裾部に埴輪列の確認もできなかった。

#### 調査区C

調査区Bの北側に設置した。埴輪の状況と墳丘裾を確認するために設定した。土層3、4は、調査区B同様上部からの流れ込みで、墳丘盛土は土層5となる。裾部も地山面を削り込んでいる部分がありそこを裾とすることができる。埴輪は見られなかった。

#### 調査区D

墳丘裾部分に関しては、地山面を削り出して墳丘としている状況が確認できた。土層6は上からの流れ込みと考えられる。ここの調査区の下方に埴輪片の出土が見られた。埴輪を裾部に設置していた状況ではなく、上部からの流入土の中に含まれていた。

#### 調査区E

調査区Aの西側に設けた。調査区Aでは埴輪が集中しており、また、埴輪を含む層の広がりを確認する意味で設けた。その結果、土層10から上の土の堆積は、上からの流入土と判断できた。また、墳丘裾と考えられる変化点には、調査区Aにつながる平坦面をもちそこを裾部とすることが出来る。しかし、ここからは埴輪のままとった出土は見られなかった。

#### 調査区F

調査区Eの北側に設けた。調査区1（西）から調査区Fにかけて見られた古墳の形状に違和感があるために、土層堆積を確認した。

その結果、調査区Eからつながる墳丘裾部を削りだしており、土層14は墳丘盛土と考えることの出来るものであり、土層10、12、13については、上からの流れ込みで埴輪片を少量含んでいた。その上部にある土層11については、調査区1（西）で見られた、過去の調査の際に掘り出した土が堆積しており、違和感を持つものとなっていた。ここからは、埴輪片と共に須恵器も出土した。墳頂部の埋め戻しの土から須恵器片が出土していることから矛盾は生じていない。

#### 調査区G

北西部に設けた調査区で、墳頂から墳裾にかけて落差の小さい場所である。北側の平坦面とのつながりを確認するために設けた。土層19、20、21、22は、墳丘盛土とすることが出来、墳丘裾と考えられる部分は、調査区2（北）の区画溝のところでも見られた味噌岩の岩盤部分を削り出している。明確な形ではないが北側からつながる区画溝の端部と考えられる部分が確認でき、それから上の土に関しては流れ込みと考えられた。ここからは、埴輪片の出土が見られた。

### ○墳頂部の様子

墳頂部に関しては、過去の調査時にほとんど全て掘削を受けている状況が見られ、比較的残りがいいと考えられた部分に調査区を設け、埴輪の設置痕跡等がないかを確認した。

#### 調査区H

墳丘の肩部分に設け、確認したが、埴輪の底部及び設置痕跡等は認められなかった。比較的残りのいい部分と考えていたが、他の調査区でも見られたのと同様に流入土が見られた。他の調査区では、そこに埴輪が含まれていることなどから、古墳の上部に関しては自然崩壊を含め流れ落ちている状況が考えられ、墳頂部での明確な埴輪の設置痕は確認できなかった。

### ○出土遺物（図27～図31）

出土遺物は、墳頂部の調査区3、4、5の埋土（過去の調査時の埋め戻し土：図21）の中に須恵器片が見られた。須恵器はいずれも細片で図化するには至らなかった。また、同様の埋土中に約5cm程の小石（川原石）の出土があった。これらは、50cm×40cmのコンテナの底に敷き詰められる程度の量であった。山土には当然混じらないものであり、意図的に運び込まれたものと考えられ、主体部の礫床部分に使われていたものと考えられる。

調査区1（西）からは、円筒埴輪片と考えられるものが、調査区の西端の流入土と考えられる層から出土している。同じく、調査区1（東）も円筒埴輪片の出土が見られ、流入土と考えられる層の中から出土した。多くは墳丘裾部分の東端部分での出土であった。こちらに関しては、墳丘の中間部分の流入土層中からも出土した。

調査区2（北）からは、区画溝と考えられる場所から、円筒埴輪片の出土があった。これも流入埋土中からの出土であった。

調査区Aは、円筒埴輪片、形象埴輪片、須恵器片、土師器片の出土があった。ここからは、他の調査区とは違い、まとまった量の出土があった。また、復元可能のものも多く見られたが、底部が欠損するものや、縦に半分欠損するものなど完全な形で出土したものは無かった。須恵器は、壺や甕が出土したが、埴輪片に混じるような状況であった。いずれも破片であり、完形になるものは見られなかった。

調査区Dからは円筒埴輪片の出土があった。調査区1（東）と同様の出土状況であった。細片のため図化できなかった。

調査区Eからは、埴輪片の出土は少量見られ、須恵器片の出土があった。

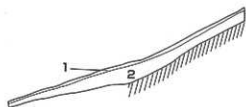
調査区Fからは、埴輪片と須恵器片の出土が少量見られた。

調査区Gからは、円筒埴輪片の出土があったが、細片のため図化するまでには至らなかった。

調査区B、C、Hからは遺物の出土は無かった。

124.0m  
調査区 B

124.0m

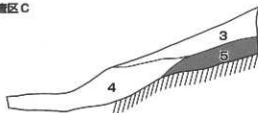


//// は填丘

● は填丘盛土

124.0m  
調査区 C

124.0m



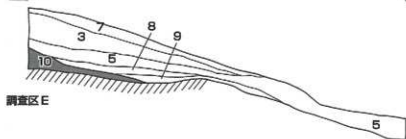
124.0m  
調査区 D

124.0m



124.0m

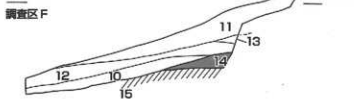
124.0m



調査区 E

124.0m

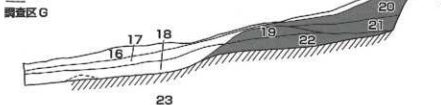
124.0m



調査区 F

125.0m

125.0m



調査区 G

- 1 暗灰色腐食土 (2.5Y4/2)
- 2 暗茶灰色土 (2.5Y4/2)
- 3 暗黄茶色土 (7.5YR4/3)
- 4 淡茶灰色土 (10YR4/2)
- 5 暗灰色シルト質土 (10YR4/3)
- 6 暗茶灰色土 (7.5YR4/1)
- 7 暗灰色腐食土 (10Y4/1)
- 8 淡灰色シルト質土 (10YR3/3)
- 9 黄灰色土 (10YR4/3)
- 10 暗黄灰色土 (10YR4/3)
- 11 暗黄茶色土 (10YR3/2)
- 12 暗灰色シルト質土 (7.5YR4/3)
- 13 暗茶色土
- 14 淡黄灰色土 (10YR4/3)
- 15 明赤褐色土
- 16 褐灰色土 (5Y4/2)
- 17 暗黄灰色土 (10YR4/3)
- 18 暗茶灰色土 (10YR4/2)
- 19 黄茶褐色土 (10YR4/2)
- 20 淡茶褐色土 (10YR3/2)
- 21 明黄灰色土 (7.5YR4/2)
- 22 茶灰色土 (10YR3/3)
- 23 暗黄茶色織混じり土



図26 調査区土層図

○須恵器 (図 27)

須恵器は、調査区A, Eから出土したものと表採品ではあるが1点図化したものがある。調査区Aからは、27-1, 2, 6, 7が出土し、1は口径24.0cm (復元径) で体部外面には、タタキメがある。2は口径20cm (復元径) で、体部外面は格子タタキがあり、内面は、同心円文が認められる。6は腹径10.7cm (復元径) を計る處で、底部にタタキメが認められる。腹部には甕の特徴である穿孔がある。7は台の脚部と考えられ、透かし穴の痕跡も見られる。底径19.4cm (復元径) を計る。

調査区Eからは、27-3, 5が出土し、3は外面に波状文があり、その下に沈線を2本刻む。5は壺で体部外面には格子タタキがあり内面には同心円文がある。外面のタタキは他のものといずれも良く似ている。

表採品ではあるが、27-4は口縁部で口径16cm (復元径) を計る。作りは薄く甕の口縁部の可能性がある。

出土須恵器観察表

図版番号	地区名	種別	器種	法量 (cm)				色調	形態・技法	胎土	焼成
				口径	腹径	底径	器高				
27-1	A	須恵器	甕	(24.0)			残7.3	灰10Y5/1	ロクロナデ タタキメあり	精良	良好
27-2	A	須恵器	甕	(20.0)			残7.6	灰10Y7/1	ロクロナデ 格子タタキあり 同心円文あり	精良	やや良
27-3	E	須恵器					残6.3	灰5Y6/1	ロクロナデ 波状文あり	精良	良好
27-4	表採	須恵器	甕	(16.0)			残2.6	黄灰2.5Y6/1	ロクロナデ	精良	良好
27-5	E	須恵器	甕				残9.4	灰白5Y7/1	タタキ目の後、カキメ 同心円文あり	精良	良好
27-6	A	須恵器	甕		(10.7)	2.7	残8.3	灰N6/1	ロクロナデ タタキメあり	精良	良好
27-7	A	須恵器				(19.4)	残3.2	灰7.5Y5/1	ロクロナデ	精良	良好

○埴輪 (図 28~31)

埴輪は、円筒埴輪、形象埴輪が出土しており、円筒埴輪は、調査区1 (西) (東)、調査区2 (北)、調査区A, D, E, F, Gから出土している。しかし、調査区Aを除いては、ほとんどが細片であり図化するまでには至らなかった。

今回図化できたものは、調査区Aから出土したものであり、全体がわかり得るものは、28-6のみであり、他は、口縁部がわかるもの6点 (28-1, 2, 3, 4, 5, 7) 底部がわかるもの2点 (29-4, 5) である。胴部のみを図化したものは3点 (29-1, 2, 3) になる。

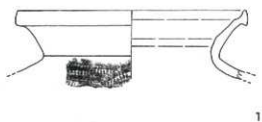
形象埴輪は、全体を判りえるものはないが、人物埴輪、器財埴輪等が考えられる。図化したものは、9点になる。(図30, 31)

○円筒埴輪 (図 28, 29)

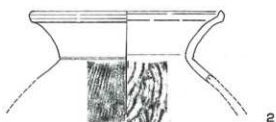
全体像が判るものは、28-6のみであるが、高さ42.8cmを計り、口径28.4cm (復元径) 底部径14.6cm (復元径) となり、突帯は3本貼り付けられ、その両端にユビナデを施す。突帯間隔は12.2cmあり、4段となる。上から2段目に丸い透かし孔を開ける。外面には、ナナメハケが見られる。内面は粘土の積み上げの際の痕跡が上から3段目の部分で顕著に残り、ユビナデを施している。

28-1は、口縁部の上から1段目と突帯と上から2段目が判るもので、口径21cm (復元径) を計る。外面には、ナナメハケを施し内面はユビナデが見られる。上から2段目には、

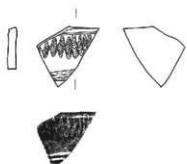




1



2



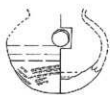
3



4



5



6



7



圖27 出土須惠器

丸い透かし孔があったことが判る。28-2も口縁部と突帯が残っているもので、口径29.4cm(復元径)となり、外面ナナメハケ、内面ユビナデは同じである。28-1に比べると口縁は開き気味になる。28-3は、ひずみが大きく口縁部にゆがみが見られる。口径24.6cm(復元径)となり、上から3段目まで残存する。外面はナナメハケ、内面はユビナデが施される。上から2段目には、いびつながらも丸い透かし穴があげられる。口縁は28-2と同様に開き気味のものである。28-4は上から2段目までが残るもので、口径25.8cm(復元径)となるもので、外面内面の成型と調整は他の物と同様である。これも、上から2段目に丸い透かし孔をあける。28-5は上から3段目まで残り、外面はナナメハケ、内面は上から2段目までハケメが見られ、その後にユビナデを施す。口径24.5cm(復元径)となり、上から2段目と3段目に丸い透かし孔が開けられる。孔は2段目に対して3段目は、ほぼ90度の位置にあげられている。28-7は、28-3と同じくひずみが大きく、復元においても口縁部の広がりが大きくなっている。そのために、口径37.8cm(復元径)となっている。これは、正円ではなく、ひずみのある楕円形の可能性があるためである。上から3段目までは残り、4段目もわずかに見られる。外面ナナメハケと上から3段目と4段目には縦方向のハケメが見られる。内面はユビナデが見られる。また、上から3段目に丸い透かし孔があげられる。

胴部と底部が残るものは、図29に見られるもので、29-1は突帯間がやや丸く彫らむ様相を呈する。外面は、粗いナナメハケが施され、内面はユビナデが見られる。焼成はやや不良で他のものに比べて軟質である。突帯間には丸い透かし孔があげられる。29-2は、突帯は残りが悪いが、突帯間に丸い透かし穴があげられ、外面はナナメハケ、内面はユビナデと一部粗いハケメが残る。29-3は、29-1と同じように胴部が丸みを帯びる部分が見られる。丸い透かし穴があげられ、外面ナナメハケと内面ユビナデは同様である。一部、28-5にも見られるような横方向のハケメも見られる。

29-4は、底径17.2cmをはかり、外面は縦方向のハケメがあり、内面はユビナデが見られる。突帯の上部に丸い透かし孔の一部が見られる。29-5は、底径18cm(復元径)のもので、外面は縦方向のハケメと内面はユビナデが見られる。

円筒埴輪は、全容がわかりえるものは28-6しかないが、全体的な様子を概観すると、相山古墳の埴輪は、突帯は3本もち4段となるもので、上から2段目と3段目に丸い透かし孔をあけるのを基本としている。

成型は、底部から粘土紐(板)を積み上げ、外面底部付近はタテハケとなり、上から3段目くらいからナナメハケを施し、その上に、突帯を貼り付ける。さらに、突帯を貼り付けた後に丸い透かし孔をあけるのを基本としている。ほとんどのものは焼成は良好であり、一部やや不良のものもあるが、黒斑などはみられない。

#### ○形象埴輪(図30, 31)

形象埴輪と考えられるもので、図化できたものは図30, 31のものである。他にも細片のものも少量認められる。

30-1は人物埴輪の腕の部分と考えられ、形状から左腕部分と思われる。肩に近い部分は粘土を筒状にして空洞になるつくりになっている。外面はナデによって調整している。手にあたる部分はどこかに接地していたような状態で、親指部分に当たるところから欠損(はがれている状況)している。30-2は、8本の矢が線刻で表現されており、この固体の左右は生きていることから、8本を表現していることがわかる。大きさからして、単独の

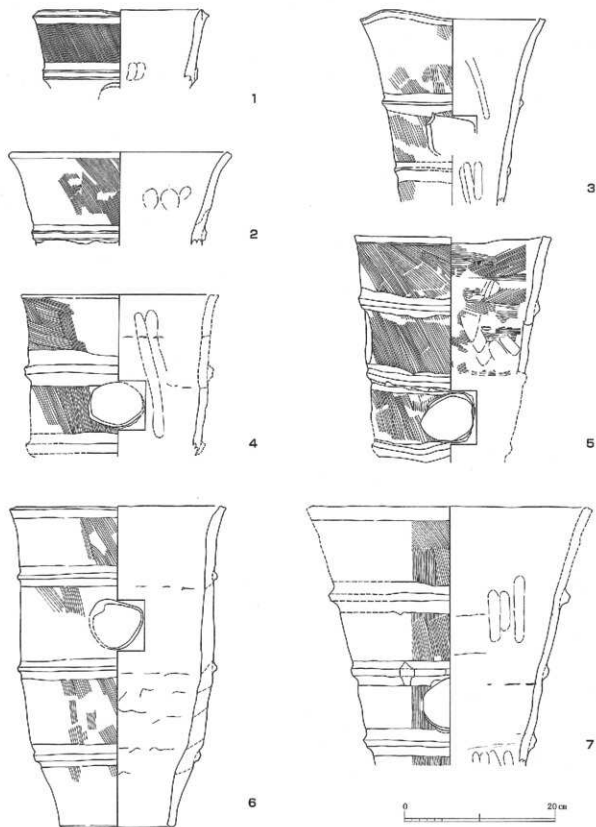


图28 出土埴輪（円筒埴輪）

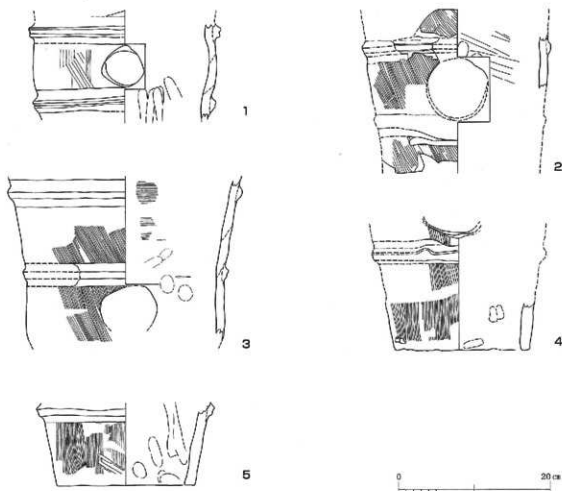


図29 出土埴輪（円筒埴輪）

ものではなく、人物埴輪に伴って付けられていた可能際が高い。外面は丁寧にナデている。一方表面はユビナデを施しつつも凹凸の有る粗いつくりになっている。他のものと比べても胎土は細かいものである。30-5は一見して円筒埴輪の底部の感もあるが、底部付近の荒い突帯の状況と外面のケズリのような粗いナデや透かし孔の開け方などは他の円筒埴輪とは異質のもので、形象埴輪の基部とすることができるものである。底径は楕円状をしており、1.6～1.9cmとなる。大きさ的には、円筒埴輪の底部とあまり変わらない。

30-3は30-5の基部と同じような調整が認められ、丸い透かし孔もある。焼成や胎土も良く似ており、同一固体と考えられるが、接合面等がわからずどの部位になるかは定かでない。30-4に関してもどのようなものになるかは判然としませんが、外面には、線刻が施され、なで調整がある。表示してある下端と右部分は生きており、上部分は欠損している。左側は、剥離した痕跡が残り丸みを帯びているところに付いていた感がある。裏面はユビナデが施される。

図31にあるものは、形象埴輪と考えられるが部位など不明瞭なものが多い。31-1、31-2は外面のハケメや線刻の特徴は良く似ており、同一固体かもしれない。31-1は、表示の下半分と右部分は生きており、左部分は欠損し、平たいものになっている。31-2は断面を見ると丸みを持っているのが特徴である。31-3は表示している下半分、左

部分、右上部は生きており、右下部分については何かに接地していたような感がある。断面では、左側はとがる形でおさまっている。外面はなで調整はあるが、線刻等は見られない。表面は突帯状のものが付いている。どこに接地していたかは定かでない。31-4は曲がった形のもので、外面にはハケメが施されている。内面はナデがある。30-5のような基部に貼り付いていたような状況も見られ、基部と考えられるところにはハケメなどの調整は見られない。一部透かし孔のようなものが見られる。ハケメが施されている部分の曲がっているところの端部は生きており、表側全部が作られている状況でない。よって、この方向が前面となり基部のあり方から考えれば、図示している方向で復元できる。部位等は定かでないが、人物埴輪の一部の可能性が高い。

形象埴輪は、人物埴輪と器財形埴輪と考えられるものがある。人物は武器を持つと考えられ武人的な埴輪と考えられる。

## ○まとめ

相山古墳が過去の調査された伝聞については、調査痕跡が確認できたことから明確なものとなった。墳頂部では南側の主体部のあった場所を調査した後、北側部分を調査していることがわかり、主体部は礎床と考えられる小石が埋め戻しの土から出土することから、主体部はほぼ掘削を受けていると考えられる。しかし、溝状の掘り方や固定用の石等から主軸は東西を向く形になると考えられる。

墳形については、北側の区画溝（調査区2（北））や調査区A～Gの堀の状況から、直径約20mの円墳になると考えられる。自然地形を利用しており、北側の落差は約1.3m、南側は約3.0mになる。

埴輪の出土状況から、調査区Aから顕著に出土することや少ないながらも、調査区1（東）、調査区E、調査区Gの墳丘上の流入土中から埴輪や須恵器が出土することから、それらは上部からの流れ込みと考えられる。墳頂部の削平状況や調査区Hの状況から、古墳の墳頂部には埴輪が設置されていた痕跡がわからない状況であったが、墳頂に埴輪が設置されていた可能性が高い。墳堀に設置した、主として南西方向の調査区から、円筒埴輪と形象埴輪が出土することなどから、南西方向を意識した形で設置していた可能性が高い。

円筒埴輪は全容を知るものは少ないが、高さ42.8cmを計るもので、口径などの復元径が算出できるものは、同じくらいのものになり、ほぼ、50cm以下のものになると考えられる。図化できたものについては、均一的なつくりはあまり見られず、それぞれに特徴を持つものである。しかし、基本的なつくりについては、粘土を積み上げた後、ハケで調整を加え、突帯を貼り付けた後、透かし孔をあけるという流れは共通的に見られる。内面についても、一部ハケメが残るものもあるが基本的にはユビナデで終わる。焼成については、基本的に良好であるが、過去の表採品のように硬く焼きしまったようなものは少なく、軟質のものも見られる。黒斑は有していない。

形象埴輪についても、人物埴輪と器財埴輪と考えられるものがあり、一部武器が見られることから、武人と考えられる人物埴輪の可能性が高い。他の形象埴輪についてはどのようなものか不明である。

須恵器や埴輪の特徴から6世紀前半のものと考えられる。

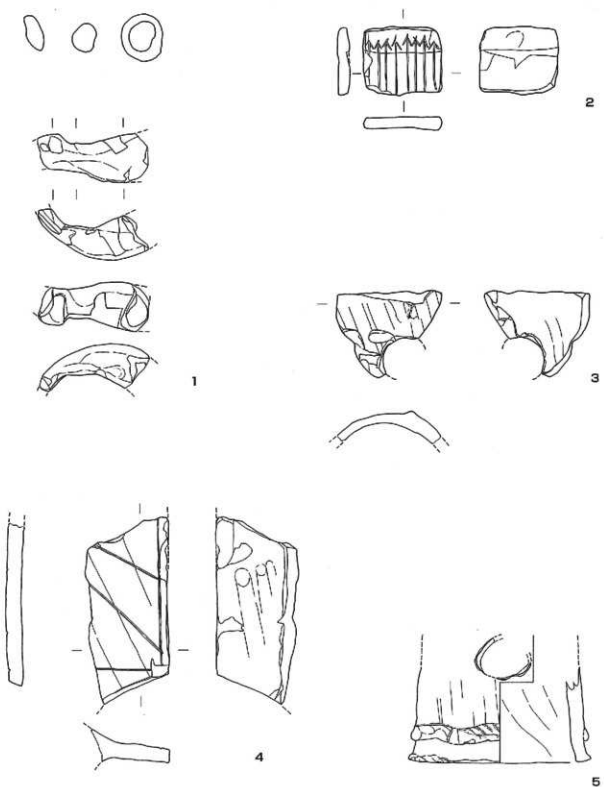


图30 出土埴輪 (形象埴輪)

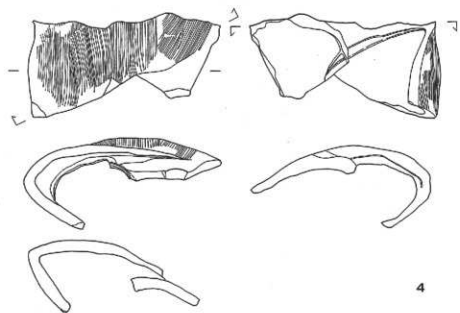
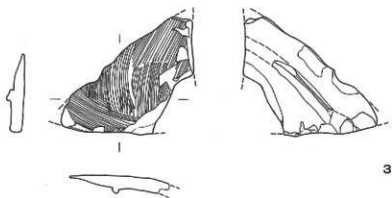
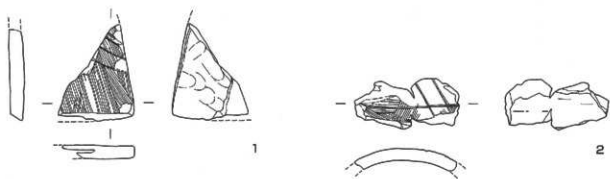


图31 出土埴輪 (形象埴輪)

出土埴輪観察表

図版番号	調査区	埴輪種別	部位等	残存高	口径 胴径 底径	底部長	交帯 間隔	突帯高	口縁 部高	器厚	粘土帯	焼成	色調	透し孔	外面	内面
28-1	A	円筒	口縁部	10.5	(21.0)			0.4	8.0	1.0		不良	にぶい橙	○	ナナメハケ	ユビナデ
28-2	A	円筒	口縁部	12.5	(29.4)			0.5	10.5	0.9		やや不良	にぶい赤橙		ナナメハケ	ユビナデ
28-3	A	円筒	体部 口縁部	25.9	(24.6)		8.8	0.5	12.1	1.0		良好	にぶい赤橙	○	ナナメハケ	ユビナデ
28-4	A	円筒	体部 口縁部	21.4	(25.8)		10.5	0.7	9.7	1.1	6.9	良好	灰青	○	ナナメハケ	ユビナデ
28-5	A	円筒	体部 口縁部	36.7	(24.5)		9.8	0.6	9.3	1.1		良好	にぶい赤橙	○	ナナメハケ	ユビナデ
28-6	A	円筒	体部 口縁部 底部	42.8	(28.4) (14.6)	8.9	12.2	0.5	9.1	1.4		やや良	にぶい赤橙	○	ナナメハケ タテハケ	ユビナデ
28-7	A	円筒	体部 口縁部	34.3	(37.8)		9.9	1.0	11.5	1.0		良好	にぶい赤橙	○	ナナメハケ タテハケ	ユビナデ
29-1	A	円筒	体部	13.3	(24.0)		9.5	0.8		1.1	4.0	やや不良	にぶい橙	○	タテハケ	ユビナデ
29-2	A	円筒	体部	22.8	(24.5)		9.5	0.5		1.1		良好	にぶい赤橙	○	ナナメハケ	ユビナデ
29-3	A	円筒	体部	22.0	(30.5)		10.5	0.7		1.2		良好	にぶい赤橙	○	ナナメハケ	ユビナデ
29-4	A	円筒	底部	16.8	17.2	11.8				1.4		良好	にぶい橙	○	タテハケ	ユビナデ
29-5	A	円筒	底部	11.0	(18.0)	8.4		0.6		1.4		良好	にぶい橙		タテハケ	ユビナデ
30-1	A	形象	人物 腕	11.7								良好	にぶい橙		ナデ	未調整
30-2	A	形象	罐 武器	7.3						1.3		良好	にぶい橙		ナデ	ユビナデ
30-3	A	形象	基部	11.0						1.6		良好	にぶい橙		ユビナデ	ユビナデ
30-4	A	形象	不明	19.8						1.6		良好	橙		ナデ	ユビナデ
30-5	A	形象	基部	13.3						1.5		良好	淡赤橙		ナデ	ユビナデ
31-1	A	形象	不明	10.3						1.4		良好	にぶい橙		ハケメ	ユビナデ
31-2	A	形象	不明	長109						1.2		良好	にぶい赤橙		ハケメ	ユビナデ
31-3	A	形象	不明	12.5						1.4		良好	にぶい橙		ハケメ	ナデ
31-4	A	形象	不明	11.0								良好	にぶい橙		ハケメ	ナデ



## 報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	平成16年度発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	5
編著者名	出田 直
編集機関	福岡町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福岡町南田原3116-1 TEL. 0790-22-0560
発行年月日	西暦2008年3月31日

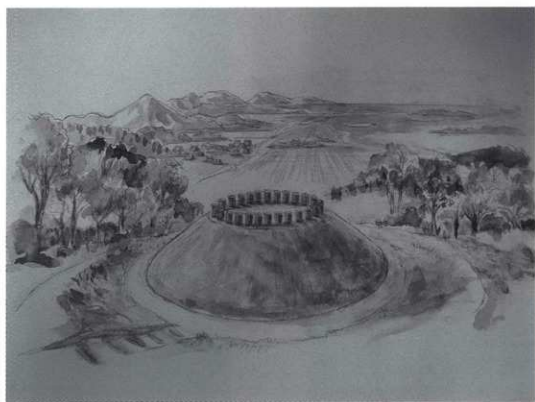
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
みなみたわらじょうりいせき 南田原条里遺跡	ひょうごけんかみごさく 兵庫県神崎郡 ふくさきちょうみなみたわら 福岡町南田原	28443	410046	34度 56分 48秒	134度 45分 34秒	2004.5.14	10	店舗建設
みなみたわらじょうりいせき 南田原条里遺跡	ひょうごけんかみごさく 兵庫県神崎郡 ふくさきちょうみなみたわら 福岡町南田原	28443	410046	34度 56分 39秒	134度 45分 38秒	2004.9.3	20	分譲住宅 造成
みや まいせき 宮ノ前遺跡	ひょうごけんかみごさく 兵庫県神崎郡 ふくさきちょうふくだあざ 福岡町福田字 なかてじ 中筋	28443	410070	34度 57分 34秒	134度 44分 44秒	2004.9.14	8	無線鉄塔 建設
あいやまこふん 相山古墳	ひょうごけんかみごさく 兵庫県神崎郡 ふくさきちょうおのおめあざ 福岡町大貫字 あいやま 相山	28443	410038	34度 57分 10秒	134度 46分 57秒	2004.9 ～ 2005.3	100	その他の 開発

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南田原条里遺跡	条 里	中 世	なし	土師器・須恵器	
宮ノ前遺跡	散布地	中 世	なし	なし	
相山古墳	古 墳	古 墳	古墳、主体部	須恵器・埴輪	直径約20mの円墳、主体部は礫床をもつ。円筒埴輪と形象埴輪を有し、須恵器の出土を見る。

要 約	<p>南田原条里においては、遺構を確認できず、宮ノ前遺跡においても同様であった。相山古墳は、周辺整備のために調査を行い遺跡の性格と範囲を明確にするものであり、主体部、埴輪の状況、墳形、規模がわかった。</p>
-----	--



# 図 版



相山古墳イメージ図

1 西治公民館予定地



調査前の状況



作業風景



作業風景



調査区 1



調査区 2



調査区 3



調査区 4



調査区 5

2 南田原条里遺跡 (第5次)



調査区1掘削状況



調査区1



調査区2掘削状況



調査区2

4 宮ノ前遺跡



調査前の状況



作業風景



調査区1



調査区2

3 南田原条里遺跡 (第6次)



調査前の状況



作業風景



調査区1



調査区2



調査区3



調査区5

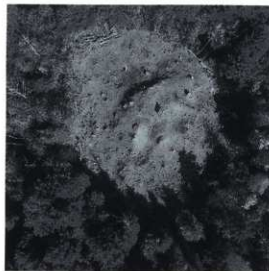


調査区4

5 相山古墳



相山古墳遠景



相山古墳調査前の状況



古墳からの眺望



調査前の状況（調査区A）



調査前の状況（調査区D）



調査前の状況（調査区G）



測量作業風景



作業風景



調査区1（西）墳頂部



調査区1（西）墳丘裾



調査区1（西）下層



調査区1（西）堆積状況



調査区1（西）墳丘裾



調査区1（東）





調査区1 (東)



調査区1 (東) 墳丘



調査区1 (東) 墳丘裾



調査区1 (東) 墳丘裾部分



調査区2 (南) 墳頂部



調査区2 (南)



調査区2 (南)



調査区2 (南) 下から



調査区 2 (南) 墳丘



調査区 2 (南) 墳丘



調査区 2 (北) 墳頂部



調査区 2 (北) 墳丘部



調査区 2 (北) 区画溝の堆積



調査区 2 (北)



調査区 2 (北) 遺物出土状況



調査区 3



調査区 3



調査区 3



調査区 4



調査区 4



調査区 4



調査区 4



調査区4 (主体部)



調査区4 (主体部)



調査区 4 土層



調査区 5



調査区 5



調査区A検出状況



調査区A上面遺物出土状況



調査区A遺物出土状況



調査区A遺物出土状況



調査区A遺物出土状況



調査区A遺物出土状況



調査区A遺物出土状況



調査区A遺物出土状況



調査区A下層



調査区A下層



調査区A取り上げ後



調査区Aサブトレ



調査区A土層





調査区B



調査区C



調査区D



調査区E



調査区E



調査区F



調査区G



調査区G

相山古墳遺物 (須恵器)



27-1



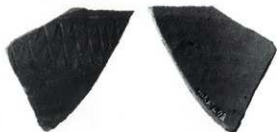
27-1



27-2



27-2



27-3



27-3



27-4



27-4



27-5



27-5



27-6



27-7



27-7



27-6

相山古墳遺物 (円筒埴輪)



28-1



28-3



28-2



28-2



28-4



28-5



相山古墳遺物（円筒埴輪）



28-6



28-6



28-7



29-2



29-1



29-1

相山古墳遺物（円筒埴輪）



29-5



29-4



29-4

相山古墳遺物（形象埴輪）



30-1



30-1



30-1



30-1

相山古墳遺物 (形象埴輪)



30-2



30-2



30-4



30-4



31-1



31-1



31-2



31-2

相山古墳遺物（形象埴輪）



30-5



30-5



31-3



31-3



31-4



31-4



## 埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年度発掘調査報告

平成20年（2008年）3月31日

編集発行 福崎町教育委員会

〒679-2280

兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1

TEL. 0790-22-0560

印刷 クリヤ印刷所

〒671-1116

兵庫県姫路市広畑区正門通4丁目2-9

TEL. 079-236-3679

